

高校運動部参加と学校適応感

岡田 猛*・武隈 晃*・廣瀬 勝弘**・藤田 勉***

(2008年10月30日 受理)

Sports Club Participation and Subjective Adjustment in High School

OKADA Takeshi · TAKEKUMA Akira · HIROSE Katsuhiko · FUJITA Tsutomu

Abstract

The present study was performed to investigate effects of participation in a sports club as an extracurricular activity on subjective adjustment to high school life. Students belonging to sport clubs ($N=231$), culture clubs ($N=48$) and students not belonging to any club ($N=97$) in 4 high schools were analyzed. Factor-analysis was executed with a set of 30 items in the subjective adjustment scale and five factors were extracted. Sports club participation is significantly related to the factor of “usefulness”, but not to the factors, “feelings of blending in with the surroundings”, “feeling of being trusted”, “sense of comfort”, or “absence of feeling of alienation”.

A comparison of two types of high school with multiple regression analysis suggests that the relationship of sports club participation to subjective adjustment to high school life is dependent on school-type, i.e. whether academic or practical.

Key words: sports club participation, subjective adjustment to high school life, multiple regression analysis

* 鹿児島大学教育学部 教授

** 鹿児島大学教育学部 准教授

*** 鹿児島大学教育学部 講師

はじめに

(財)全国高等学校体育連盟の調べによると、2007年度の高校における運動部の登録者は延べ1,201,886人(男子754,225人、女子448,661人)におよび、全生徒に占める割合は35.4%になっている。この数字はしかし公式の競技会にも参加する競技者で、部に実際に参加し活動する部員数はもっと多くなる。

文部省の調査(1997:12)では、男子の56.3%、女子の41.1%が運動部に所属している。Benesse教育研究開発センターの調べ(2007)では「運動部に入って積極的に参加している」高校生は、男子で61.5%、女子で41.1%にのぼっている。中学に比べると参加者は10%程度低下するものの高校においても多くの生徒が運動部活動に参加しており、運動部は高校生活の重要な領域を構成していることがわかる。

このように多くの高校生が運動部に所属し、学校生活を送っているが、彼らはどのようなことを運動部活動を通して身に付けているのだろうか。前記文部省の報告書では、「友達ができた」50.1%、「スポーツの楽しさ」41.6%、「技術が向上してきた」41.6%、「体力が伸びてきた」37.4%、「精神力や責任感が伸びてきた」28.8%、「生活が充実している」18.7%、といった項目が挙がっている。ところで、高校における学校不適應の問題は依然として終息の兆しをみせていない。文部科学省の調査(2006)によると、2006年度における高校における不登校生徒数は57,544人、全在籍者数の1.65%を占めている。さらに中途退学者数は77,027人、2.20%にのぼっている。進路の変更といった理由もあり、これらが全て不適應現象とはいえないまでも、10万人以上の高校生が学校へ通えない、または途中で離れるという事態は問題を含んでいるといえよう。こうした数字に表れる学校不適應の背後には様々な程度、範囲における不適應現象が潜在していることが推察される。

もちろん、こうした不適應現象は生徒にのみその原因が帰せられるべきことではなく、さまざまな要因が介在しているのだろう。

本研究では、学校適應の課題に取り組んでいる先行研究に導かれながら、運動部所属という要因が高校における学校適應感にどのような関連を有しているかを明らかにしたい。

前述した運動部への所属状況、運動部活動による成長・発達の認識からすれば、それらの関連には強い作用がはたらいっていることが予想されるであろう。

方法

対象

調査の対象としたのは公立の共学A普通高校102人(男子46人、女子56人)、公立の共学B工業系高校126人(男子111人、女子15人)、公立の共学C職業系高校50人(男子17人、女子33人)、公立の共学D職業系高校97人(男子36人、女子61人)の、合計375人(男子210人、

女子 165 人) である。

学校適応感という本研究の趣旨を勘案しいずれも調査対象を 2 年生とした。1 年生は部活動、学校生活に慣れてきてはいるものの学校生活全体を捉えるにはまだ不十分であり、3 年生は部活動から引退し進路へ向けた取り組みに集中する時期である。2 年生は年度末ともなると学校生活全般について知悉し、部活動においても責任ある地位を求められる状況に置かれることになる。(吉村 1997)

調査内容・方法

調査票を送付し、学級担任による集合調査の方法によった。

調査内容は大きく 2 つの領域から構成される。「学校適応感尺度 (30 項目)」および学校生活要因としての「友人との関係 (7 項目)」「教師との関係 (6 項目)」「学業 (7 項目)」である。「学校適応感尺度」は大久保 (2005) によって中学から大学にいたる青年全体に適応できるものとして作成された、個人と環境 (学校) が適合しているときの認知や感情に焦点を当てた尺度である。生活要因尺度は大久保・青柳 (2004) によるものである。

回答はいずれにおいても、「全くあてはまらない (1 点)」～「非常によくあてはまる (5 点)」の 5 段階尺度によった。

学校適応感、各学校生活要因では、各測定項目の得点を足し上げた合計点をそれぞれの指標として用いた。

「部活動所属」という変数は本研究におけるひとつの特徴となっており、研究課題にとって重要な要因となる。

期間

2008 年 2 月～4 月。

結果

学校適応感の構成因子

表 1 は学校適応感を測定する 30 項目を因子分析した結果である。各測定項目は調査票では「学校において」という文が頭に置かれている。

因子の抽出は主成分分析、回転は Kaiser の正規化を伴うバリマックス法によった。

初期の固有値 1 以上の 5 因子が抽出され、5 因子で 59.0% が説明された。

各下位尺度の内的整合性を確認するために Cronbach の α 係数を算出した。第 1 因子が .905、第 2 因子 .850、第 3 因子 .800、第 4 因子 .761、第 5 因子 .739 である。通常、0.8 (0.7) 以上であれば適切な尺度とはみなせるので、.739 と .905 の間にある 5 つの因子は信頼性を備えていると判断してよいであろう。

因子の解釈、命名を試みてみよう。

表1 学校適応感の因子分析結果：主成分分析・バリマックス回転法

| | 因子負荷量 | | | | | 共通性 | |
|------------------------------|------------------------------|------|-------|-------|-------|-------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | |
| 溶け込め感 ($\alpha = .905$) | 8、周囲となじめている | .813 | .183 | .081 | .054 | .218 | .751 |
| | 27、周りと助け合っている | .781 | .176 | .091 | .144 | .026 | .671 |
| | 1、周囲に溶け込めている | .781 | .153 | -.081 | -.025 | .168 | .669 |
| | 5、周りの人と楽しい時間を共有している | .738 | .111 | .003 | .274 | .182 | .665 |
| | 26、自由に話せる雰囲気である | .700 | .086 | .139 | .269 | .016 | .589 |
| | 28、ありのままの自分を出せている | .648 | .156 | .138 | .198 | .083 | .509 |
| | 14、自分と周りがかみあっている | .637 | .364 | .126 | .041 | .123 | .571 |
| 頼られ感 ($\alpha = .850$) | 30、学校生活は充実している | .520 | .207 | .299 | .470 | .191 | .660 |
| | 17、周りに共感できる | .453 | .362 | .320 | .242 | .041 | .499 |
| | 20、周りから頼られていると感じる | .282 | .783 | .097 | .093 | .125 | .726 |
| | 16、周りから期待されている | .098 | .747 | .252 | .068 | .115 | .650 |
| | 21、周りから必要とされていると感じる | .333 | .729 | .153 | .112 | .176 | .709 |
| 有益性 ($\alpha = .800$) | 10、周りから関心を持たれている | .254 | .653 | .032 | .049 | .081 | .500 |
| | 12、存在を気にかけている | .098 | .625 | -.068 | .173 | -.041 | .436 |
| | 23、良い評価がされていると感じる | .086 | .610 | .316 | .148 | .168 | .530 |
| | 15、学校で学んだことはこれからの自分のためになると思う | .094 | .048 | .823 | .109 | .117 | .713 |
| | 6、将来役に立つことが学べる | .089 | .021 | .815 | .041 | .114 | .687 |
| 居心地よさ ($\alpha = .761$) | 18、やるべき目的がある | .134 | .292 | .620 | .205 | .155 | .553 |
| | 13、熱中できるものがある | .030 | .256 | .554 | .346 | -.041 | .494 |
| | 29、成長できると感じる | .440 | .189 | .481 | .273 | .198 | .574 |
| | 4、好きなことができる | .158 | .249 | .208 | .739 | -.030 | .677 |
| 非疎外感 ($\alpha = .739$) | 19、リラックスできる | .318 | .241 | .262 | .686 | -.005 | .698 |
| | 7、幸せである | .417 | .143 | .289 | .611 | .037 | .653 |
| | 2、安心する | .487 | .167 | .197 | .577 | .032 | .638 |
| | 22、周りから指示や命令をされているように感じる (R) | .018 | -.202 | -.179 | .355 | .345 | .318 |
| | 9、自分だけダメだと感じる (R) | .074 | .145 | .027 | -.023 | .749 | .589 |
| 固有値 | 24、周りに迷惑をかけていると感じる (R) | .038 | .206 | .060 | .075 | .732 | .588 |
| | 25、自分が場違いだと感じる (R) | .141 | .081 | .196 | .173 | .714 | .604 |
| | 3、役に立っていないと感じる (R) | .153 | .004 | .087 | -.175 | .532 | .344 |
| | 11、嫌われていると感じる (R) | .388 | .076 | .150 | .084 | .504 | .440 |
| | 固有値 | 5.47 | 3.80 | 3.07 | 2.74 | 2.62 | |
| | 寄与率 (%) | 18.2 | 12.7 | 10.2 | 9.2 | 8.7 | |
| | 累積寄与率 (%) | 18.2 | 30.9 | 41.1 | 50.3 | 59.0 | |

* (R) は逆転項目

第1因子は、「周囲となじめている」「周りと助け合っている」「周囲に溶け込めている」「周りの人と楽しい時間を共有している」等の項目からなっており、自己と周囲の相互の間に壁がなく親和的な関係ができてきている状況であり「溶け込め感」と命名する。18.2%の説明力をもっている。第2因子は「周りから頼られていると感じる」「周りから期待されている」「周りから必要とされ

ていると感じる」という項目があがっているように、周囲から頼られ、期待され、必要とされている自己感覚である。「頼られ感」と命名されよう。説明力は12.7%である。第3因子は「学校で学んだことはこれからの自分のためになると思う」「将来役に立つことが学べる」「やるべき目的がある」といった項目で構成されている。将来に向けて利益をもたらす機会として学校生活をとらえているので「有益性」と命名しておきたい。10.2%の説明力である。第4因子は「好きなことができる」「リラックスできる」「幸せである」といった、障害にあたるものが無く学校にフィットできている感覚で、「居心地よさ」と命名できよう。9.1%の説明力である。第5因子は「自分だけダメだと感じる」「周りに迷惑をかけていると感じる」「自分が場違いだと感じる」といった、自己を周囲から取り残され、足を引っ張っている存在とみなす感覚であり、逆転項目であることを考え「非疎外感」と命名する。説明力は8.7%である。

大久保(2005)は因子分析の結果、「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」という4つの因子を抽出している。「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」は、本調査結果の「有益性」「頼られ感」「非疎外感」に重なり、第1因子の「居心地の良さの感覚」は「溶け込め感」「居心地よさ」に分割されることになった。「溶け込め感」は周囲との交流という内容で、「居心地よさ」は個人内の安心感という内容で、「居心地の良さの感覚」を二分している。

親しみやすい命名を心がけたことにより、因子名が異なることとなったが、内容的には大久保による因子構造と類似したものであり、その安定性が追証される結果となった。

学校適応感得点の性別、部所属別違い

学校適応感は男女の性別、運動部、文化部、無所属の部所属別でどのように異なるのだろうか。表2は学校適応感得点を従属変数、性別、部所属状況を独立変数にして、2要因分散分析をおこなった結果である。

表2 性別×部所属状況ごとの学校への適応感の平均値と2要因分散分析結果

| | 男子 | | | 女子 | | | 性別 F 値 | 部所属状況 F 値 | 交互作用 F 値 |
|-------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------|--------------|-------------|
| | 運動部 N=155 | 文化部 N=10 | 無所属 N=45 | 運動部 N=75 | 文化部 N=38 | 無所属 N=52 | | | |
| 溶け込め感 | 33.283 (6.144) | 26.900 (5.626) | 31.578 (7.356) | 35.562 (6.144) | 32.189 (7.852) | 31.578 (7.327) | 5.007 *** | 8.990 ** | 1.025 |
| 頼られ感 | 16.439 (4.144) | 15.200 (5.653) | 16.378 (4.371) | 16.479 (4.035) | 15.395 (3.507) | 15.500 (4.002) | 2.173 | 1.349 | 0.448 |
| 有益性 | 18.941 (3.927) | 17.333 (4.183) | 17.444 (3.911) | 18.920 (3.664) | 17.892 (3.665) | 16.115 (4.143) | 1.269 | 10.322 *** | 1.144 |
| 居心地よさ | 15.987 (3.595) | 14.400 (3.239) | 15.111 (3.851) | 15.800 (4.003) | 15.316 (4.545) | 14.745 (4.673) | 1.991 | 2.400 | 0.323 |
| 非疎外感 | 16.000 (3.531) | 14.400 (3.062) | 15.356 (2.955) | 15.867 (3.481) | 15.421 (3.717) | 15.923 (3.704) | 1.446 | 1.242 | 0.582 |

上段は平均値、()は標準偏差

「溶け込め感」「頼られ感」「有益性」「居心地よさ」「非疎外感」の5因子で性別、部所属状況のあいだに交互作用を示した因子はなかった。このことは、いずれの因子においても運動部、文化部、無所属ごとの学校適応感得点は男女の性別で異なることはない、部所属別と学校適応感の関連性は男女別の影響を受けることは無い、ということの意味する。

性別、部所属別の主効果に目を移すと、「溶け込め感」は両独立変数で、「有益性」において部所属別で主効果が認められた。

「溶け込め感」では性別において女子が男子より有意に高く、部所属別では運動部が無所属より有意に高い。

部所属別で主効果のみられた「有益性」では「溶け込め感」と同じく、運動部において無所属より有意に高い得点がみられた。

学校適応感への運動部所属の影響（全体）

学校適応感はさまざまな学校生活要因から影響を受けているであろう。表3は全サンプルについて、「友人との関係」「教師との関係」「学業」といった一般的学校生活要因に加えて、部の所属状況が学校への適応感にどのような影響を及ぼしているかを重回帰分析した結果を示したものである。部所属状況については「無所属」を参照カテゴリーとして用い、運動部所属、文化部所属をそれぞれダミー変数に指定している。

表3 学校への適応感と学校生活との関連（全体）

| | 溶け込め感 | 頼られ感 | 有益性 | 居心地よさ | 非疎外感 |
|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 友人との関係 | 0.971 *** | 0.311 *** | 0.155 *** | 0.283 *** | 0.160 *** |
| 教師との関係 | 0.126 ** | 0.055 | 0.246 *** | 0.283 *** | -0.062 |
| 学業 | 0.089 | 0.274 *** | 0.253 *** | 0.080 | 0.218 *** |
| 運動部ダミー | 1.072 * | 0.046 | 1.566 *** | 0.476 | 0.067 |
| 文化部ダミー | -1.240 | -0.552 | 1.120 * | 0.074 | -0.393 |
| 決定係数 | 0.661 *** | 0.353 *** | 0.436 *** | 0.321 *** | 0.141 *** |

値は非標準化回帰係数

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

調整済みの決定係数により、取り上げた学校生活要因による学校適応感に対する説明力の大きさをみてみよう。66.1%という大きな説明を受けた学校適応感には「溶け込め感」であり、以下「有益性」「頼られ感」「居心地よさ」「非疎外感」と続く。「非疎外感」への説明力は14.1%と非常に低くなっている。しかし、いずれの決定係数も0.1%の有意性を示しており、母集団についてもこのような回帰式で各学校適応感を説明することには一定の意味があるということがいえよう。

個々の学校生活要因のなかで、最も学校適応感に影響しているのは、「友人との関係」である。5つの学校適応感全てにおいて0.1%の水準で有意な規定力を示している。「教師との関係」は「有益性」「居心地よさ」に0.1%水準で、「溶け込め感」に1%水準で有意性を示し、「頼られ感」「非

疎外感」との関連はみられない。

「学業」は「頼られ感」「有益性」「非疎外感」に対して0.1%の有意性を示し、「溶け込め感」「居心地よさ」への影響力はない。「運動部所属」は「無所属」に比べ「有益性」(0.1%水準)、「溶け込め感」(5%水準)に強く影響し、「文化部所属」は「無所属」に比べ「有益性」にたいする影響力が高い(5%水準)。

青年前期に「友人との関係」が学校適応感を最も強く規定することは他の研究でも実証されており(大久保 2005)、友人を持てることが高校生活への適応においていかに重要であるかを認識させるものである。「教師との関係」は学校文化によっては学校不適応感を醸成することもあるが、「頼られ感」「非疎外感」に有意な関係を示さないという結果は青年期における権威にたいする対抗的性向によるものと推察することができる。「学業」が「有益性」を有意に規定することの理解は容易であるが、「頼られ感」「非疎外感」に有意な関連を示すのはこの時期における対抗的文化に拮抗する位置で学業にたいする評価が機能しているという点で興味深い。

「運動部所属」「文化部所属」がともに「有益性」に有意な関連性を示す点も特徴的である。いずれにしても、将来に向けた高校生活の意義を認識する契機を部所属がもたらしけているとしたら部所属のもつ多様な機能を推察させるものである。

しかし「運動部所属」が5つの学校適応感のうち「有益性」にくわえて「溶け込め感」の2つの生活要因にたいしてだけしか有意な規定力を示さないのは先行研究に比べても意外な感にうたれる。

また、有意水準にあるわけではないが、「文化部所属」が「無所属」に比べ「溶け込め感」「頼られ感」「非疎外感」においてマイナスの係数をとることは特徴的傾向である。

学校適応感への運動部所属の影響(学校比較)

次に学校適応感と学校生活要因の関係について個別の学校単位でみてみよう。この分析意図は、学校生活要因の学校適応感に及ぼす影響は、進学校と非進学校、普通科高校と職業科高校、都市部高校と地方高校、等といった学校の特性によって異なった様相を示すことがあり得るのではないかと、いう点である。

A高校とB高校を取り上げ、学校適応感と学校生活要因の関係を個別に分析し、比較することにするが、両校とも人口が約2万2千人の地方都市に位置するので、学校を取り巻く環境の影響をコントロールでき、比較のためのよい条件を満たしている。

A高校は旧制中学の伝統を引き継ぐ普通科からなる進学校であり、4年制国公立大学へ70%強の合格者を出し、短大、専修学校を除くと就職者はほとんどいない。B高校は工業系の学科から構成され、4年制大学への進学者8.6%、就職者70.7%といった進路となっており、典型的な職業系高校である。(2007年度)

表4はA高校、B高校の学校生活要因ごとの学校適応感得点の平均値を表している。平均値間

に有意差がみられるのは「友人との関係」のみであり、A高校が1%水準でB高校より有意に高い。

表4 学校別の学校生活尺度の平均値とt検定結果

| | A高校 N=102 | B高校 N=126 | t値 |
|--------|-------------------|-------------------|----------|
| 友人との関係 | 28.182 (5.041) | 26.444 (4.638) | 2.657 ** |
| 教師との関係 | 22.228 (5.213) | 22.373 (5.069) | -0.211 |
| 学業 | 19.775 (4.862) | 19.800 (3.968) | -0.043 |

上段は平均値, ()は標準偏差 ** $p < .01$

また表5はA、B両高校被験者における運動系、文科系部への所属状況である。部への所属割合はA高校70.6%、B高校81.0%でB高校が約10%高い。運動部の所属はA高校56.9%、B高校が74.6%、となっており、先述した文部科学省による調査と比較すれば、特にB高校では運動部活動が活発である、ということがいえよう。

表5 学校別の部活加入状況

| | 運動部 | 文化部 | 無所属 | 計 |
|-----|-------------|-------------|-------------|---------------|
| A高校 | 58 56.9% | 14 13.7% | 30 29.4% | 102 100.0% |
| B高校 | 94 74.6% | 8 6.3% | 24 19.0% | 126 100.0% |

上段は度数

表6はA高校における各学校適応感に対する各生活要因の規定力をみた重回帰分析の結果である。

表6 学校への適応感と学校生活との関連 (A高校)

| | 溶け込め感 | 頼られ感 | 有益性 | 居心地よさ | 非疎外感 |
|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 友人との関係 | 0.980 *** | 0.305 *** | 0.206 ** | 0.312 *** | 0.121 |
| 教師との関係 | 0.161 | 0.007 | 0.201 ** | 0.309 *** | -0.011 |
| 学業 | 0.083 | 0.421 *** | 0.416 *** | 0.110 | 0.318 ** |
| 運動部ダミー | -0.617 | -0.584 | 1.508 * | -0.221 | -0.235 |
| 文化部ダミー | -0.492 | 1.616 | 3.097 ** | 1.822 | -0.068 |
| 決定係数 | 0.711 *** | 0.438 *** | 0.547 *** | 0.427 *** | 0.182 *** |

値は非標準化回帰係数

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

調整済みの決定係数により、取り上げた学校生活要因による各学校適応感に対する説明力の大きさをみてみよう。77.1%という大きな説明を受けた学校適応感「溶け込め感」であり、以下「有益性」「頼られ感」「居心地よさ」「非疎外感」と続く。「非疎外感」への説明力は18.1%と非常に低くなっている。しかし、いずれの決定係数も0.1%の有意性を示しており、母集団についてもこのような回帰式で各学校適応感を説明することには一定の意味があるということがいえよう。

個々の学校生活要因のなかで、最も学校適応感に影響しているのは、「友人との関係」である。「非疎外感」を除く4つの学校適応感において0.1%の水準で有意な規定力を示している。「教師との関係」は「居心地よさ」に0.1%水準、「有益性」に1%水準で有意性を示した。「溶け込め感」「頼られ感」「非疎外感」との関連はみられない。

「学業」は「頼られ感」「有益性」に対して0.1%の有意性を、「非疎外感」に1%の有意性を示し、「溶け込め感」「居心地よさ」への影響力はない。「運動部所属」は「無所属」に比べ「有益性」で5%水準の影響があり、他の生活要因では有意な差は認められない。「文化部所属」は「無所属」に比べ「有益性」に影響する度合いが高い（1%水準）。

表7はB高校における各学校適応感に対する諸生活要因の規定力を回帰分析した結果である。

表7 学校への適応感と学校生活との関連 (B高校)

| | 溶け込め感 | 頼られ感 | 有益性 | 居心地よさ | 非疎外感 |
|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 友人との関係 | 0.923 *** | 0.312 *** | 0.064 | 0.265 *** | 0.200 ** |
| 教師との関係 | 0.031 | 0.069 | 0.172 ** | 0.025 | -0.040 |
| 学業 | 0.069 | 0.269 ** | 0.238 ** | 0.102 | 0.094 |
| 運動部ダミー | 1.230 | 0.925 | 2.085 ** | 0.265 | 0.314 |
| 文化部ダミー | -2.985 | -0.808 | 0.091 | -1.478 | 0.517 |
| 決定係数 | 0.588 *** | 0.319 *** | 0.321 *** | 0.219 *** | 0.068 * |

値は非標準化回帰係数

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

調整済みの決定係数により、取り上げた学校生活要因による各学校適応感に対する説明力の大きさは「非疎外感」を除く全ての学校適応感で0.1%水準の有意性を示すが、「非疎外感」のみで5%水準と低くなった。説明力は「溶け込め感」58.8%、「有益性」32.1%、「頼られ感」31.9%、「居心地よさ」21.9%、「非疎外感」6.8%と続く。

次に個々の学校生活要因にかんする結果をみてみよう。最も学校適応感に影響しているのは、「友人との関係」である。「有益性」を除く4つの学校適応感において有意な規定力を示している。「教師との関係」は「有益性」で1%水準の有意な規定性を示すものの他の学校適応間との関連はみられない。

「学業」は「頼られ感」「有益性」に対して1%の有意性を示しているが、他の学校適応感との関連はみられない。

「運動部所属」は「無所属」に比べ「有益性」で1%水準の影響があり、他の生活要因では

有意な差は認められない。「文化部所属」は「無所属」に比べ有意な差を示す学校適応感はない。有意性は認められないものの、「溶け込め感」「居心地よさ」「頼られ感」においてマイナスの係数をとるという特徴的な結果となっている。

両高校を比較してみて、「友人との関係」「教師との関係」「学業」「部所属」という4つの独立変数による各学校適応感に対する説明力を示す決定係数はいずれも有意であり、「溶け込め感」、「有益性」、「頼られ感」、「居心地よさ」、「非疎外感」という順に説明力が弱くなるという構造も類似している。しかし両校のあいだには決定係数に一貫した差異がみられ、B高校はA高校に比べ11～22%説明力が低くなっている。

学校生活の要因ごとに各学校適応感への関連をみてみよう。両高校において最も強い関連性を示す要因は「友人との関係」である。A高校では「非疎外感」を除く4つの学校適応感で有意であり、B高校では「有益性」を除く4つの学校適応感で有意である。次に強い関連性を示すのは「学業」であり、A高校では「頼られ感」「有益性」「非疎外感」の3つの学校適応感と、B高校では「頼られ感」「有益性」の2つの学校適応感において有意である。「教師との関係」はA高校で「有益性」「居心地よさ」において有意性を、B高校では「有益性」で有意な関連性をもっている。

運動部所属者は無所属者に比べ両高校において「有益性」に有意性を示し、文化部所属者は無所属者に比べA高校においてのみ「有益性」に有意な関連性を有する。運動部、文化部ともに、「有益性」にのみ関連するという特徴を指摘することができそうである。

ところで部所属に関して他の生活要因とは異なる学校適応感との関連性をここで指摘しておきたい。有意性こそさないものの、A高校において運動部所属は有意性をもつ「有益性」を除く4つの学校適応感がマイナスの係数であるのに対しB高校では逆にプラスの係数をとるという対照性である。運動部に所属することの学校適応感への関わりは「有益性」を例外にして、A高校では各学校適応感を損なう傾向があるけれども、B高校では促進するという逆の影響を及ぼすのである。

文化部所属も両高校のあいだで一貫した方向性の違いを示すというわけではないが、各学校適応感において方向性、係数の違いが生じている。

考察

各学校適応感得点を従属変数、性別、部所属状況を独立変数にして、2要因分散分析をおこなった結果では、「溶け込め感」では性別において女子が男子より有意に高く、部所属別では運動部が無所属より有意に高い。

男性に比べ女性は一般に、融合的な同調性が高い(間宮 1979:226)、また自主性が不足し依存性が高い(津留 1970:153)とされるので、未だこの傾向が存在するということだろう。

また、文部省の調査によれば、運動部経験者はその成果として50.1%の者が「友達ができた」

と認識している。「無所属」にくらべ人間関係能力を高めていることが運動部での「溶け込め感」の高さとして現れているのであろう。

部所属別で主効果のみられた「有益性」では運動部において無所属より有意に高い得点がみられた。運動部所属者は将来の自分のためになるものを高校生活において見出しているのであるが、それが運動部活動を念頭においた反応であれば、文部省の調査による運動部経験の成果に関する認識と整合性がある。

学校適応感と学校生活要因の関連(全体)を重回帰分析した結果、運動部所属者は無所属に比べ、「溶け込め感」「有益性」で有意に高い規定力を示した。これは「友人との関係」「教師との関係」「学業」といった重要な学校生活要因を取り込んだうえでの結果であるから、前記分散分析における運動部所属と「有益性」の関連性に一層の客観性を付与したといえることができる。

竹村、他(2007; 7)は高校生を対象にした研究において、スポーツ系部活群は非部活群より課題志向性が高いという結果を得、高校生にとって学業とスポーツ活動の関係は、有限のエネルギーや時間を奪い合うという関係ではなく、むしろ補償作用により高校生のエネルギーを拡張し、学業における課題志向を高めているのではないかと述べている。課題志向性とは知識や技術を獲得したときに成功を感じる志向性のことであり、ここでいう「有益性」に親近的であるといえる。

しかし、「有益性」「溶け込め感」以外の3つの学校適応感にたいして「運動部所属」が有意な規定力を示さないということはどう考えればよいのだろうか。榊原(1995:26)や青木(1998)は運動部の学校適応感への積極的意義を指摘している。

青木によれば、生活変化出来事、日常苛立事、自尊感情、コーピング・スキル、ソーシャル・サポートといった要因を組み込んだ重回帰分析により、学校生活適応感にたいして男女とも有意な規定力を示したのは部活動適応感だけであった。

ところで、青木(1998)の研究では運動部への適応感を「退部・不適応傾向」「個人の尊重」「部員との関係」「勉強との両立」に関わる19の項目で測定し、部活動における多様性を反映した調査枠組みを設定している。本研究では運動部に“所属しているか否か”という単次元的な尺度を用いており、運動部参加における量、質の多様性を勘案すれば不十分な尺度と言わざるを得ず、こうした尺度構成の違いも影響したのかも知れない。

大久保(2005)は、学校への適応感の規定因は学校ごとに異なり、それは学校の特徴を反映するという視点を提出し、その妥当性を実証した。この視点は、例えば「教師との関係」が良好なことが即学校適応感の高いことだとする従来の研究枠組みに再考を迫る画期的なアイデアであった。

本研究では、同様な視点から、同一地域に位置するA高校とB高校を個別に分析し、比較を試みた。A高校は公立の共学校であり、ほとんどの生徒が進学する普通科の高校である。B高校

も公立の共学校で、7割が就職する工業系の高校である。

取り上げた独立変数による各学校適応感の説明力を表す決定係数はいずれも有意であるが、その大きい順に「溶け込め感」、「有益性」、「頼られ感」、「居心地よさ」、「非疎外感」となり、この順位は両高校に共通する。

しかし決定係数の大きさを比較すると、各学校適応感でB高校はA高校に比べ11～22%説明力が低くなっていた。これはどのように解釈されるべきであろうか。

両高校を区別する大きな要因は進路先であろう。ほとんどが進学するA高校にたいして、B高校の大部分の卒業生は就職する。大学進学は専門的な学問の追究という側面もさることながら、就職の先延ばしというモラトリアムの側面を多分にもつ。就職を目前にしたB高校では資格の取得、就職にかんする様々な情報の収集、希望職種・会社の確定、といった事柄に意識や時間、エネルギーが割かれることになるであろう。このような進路の違いといった要因の影響が考えられる。

また帰宅後や休日における自由な時間の過ごし方にも違いがみられるかも知れない。

いずれにしても、本調査の枠組みにおける両高校における決定係数の違いがどのような要因によるものか、解明される必要がある。

取り上げた5つの独立変数、「友人との関係」「教師との関係」「学業」「運動部所属」「文化部所属」の、従属変数としての5つの学校適応感、「溶け込め感」「頼られ感」「有益性」「居心地よさ」「非疎外感」にたいする規定パターンを対照するとき、両高校のあいだで共通するのは「運動部所属」のみである。

「友人との関係」はA高校では「非疎外感」で、B高校では「有益性」でそれぞれ有意な関連性を示さなかった。「友人との関係」ではA高校はB高校よりも有意に高い得点を示しており、このことが「非疎外感」との関連を消却しているのかもしれない。全体レベルで「運動部所属」が「有益性」に強い関連をもつという結果がでていますが、「運動部所属者」がB高校ではA高校よりも約18%多く、その分「友人との関係」の影響を減殺していると考えてよいであろう。

「教師との関係」では両高校とも共通して「有益性」と有意な関連性を有するが、A高校では「居心地よさ」とも有意な関連をもつという違いがある。地方における伝統的進学校とされるA高校ではあるが、教師とのあいだに亀裂を生ずるほどに受験勉強に追い込まれているのでもなく、「教師との関係」と「居心地よさ」が両立しているのではないかと推察される。

ところで、「教師との関係」は学校文化の有り様によっては適応感を阻害することが指摘されているが(大久保2005:313-315)、「非疎外感」において小さい係数ながらマイナス値が出ていることには留意しておきたい。

独立変数「学業」は「非疎外感」という学校適応感においては、A高校だけで有意な規定力を示す結果となった。「教師との関係」と「居心地よさ」との関連性で言及した、A高校の穏やか

な進学校という特性が関与していることが考えられる。

独立変数、従属変数のあいだで唯一、両高校における規定パターンが同じであるのが「運動部所属」であった。しかし、有意な関連性を示す「有益性」を除く他の4つの学校適応感にたいする影響のしかたは対照的である。4つの学校適応感すべての偏回帰係数において、B高校でプラスであるのにたいしA高校ではマイナスである。「無所属者」にくらべ「運動部所属者」は学校適応感にたいして否定的にさせるA高校の特性の存在をうかがわせるが、B高校にくらべてA高校での運動部所属率を約18%減少させているという背景が関与しているのかもしれない。

「文化部所属」では、A高校で「有益性」に有意な関連性を示すもののB高校で有意な関連性をもつ学校適応感は存在しない。B高校での文化部所属率がA高校の約半分であるという背景の関与が推察される。

以上、学校生活諸要因と各学校適応感の関連性を特性の異なるA高校、B高校で比較検討してみると、その関連構造は一様ではなく、それぞれの学校の特性を反映して違った様相を見せることとなった。このことは、高校における不適応問題を防ぎ、あるいは解決するには、それぞれの学校の様々な特性を踏まえて対応することが肝要である、ということを示唆する結果といえよう。

おわりに

本研究では運動部へのコミットメントは“所属”という単次元的なレベルで捉えられている。運動部に所属しているかいないかは生徒の生活の有り様を左右する重要な要因であることに間違いはないが、部活動の内実の多様性を勘案すれば十分でない面もある。文部省の調査(1997)でも、高校における入部理由は「スポーツを楽しみたかった」48.7%、「スポーツをうまくなりたかった」30.1%、「体を鍛えたかった」18.5%、「選手として活躍したかった」17.5%と、多様である。週当たり活動日数も6日(41.7%)、7日(36.1%)に集中しているものの、5日(13.2%)という部もある。

青木(1998)は運動部への適応感尺度を多次元的に構成している点は前述したとおりである。

ちなみに運動部における問題点として指摘される逸脱行動、バーンアウトといった部活動自体にかかわる不適応は学校適応感との関連を探究するとき、極めて重要な事態といえよう。運動部への適応の様相を解明する研究(桂、他1990)との関連性の追求も重要な課題になってこよう。

いずれにしても、部活動におけるコミットメントの多様性を反映した調査の設計が必要になってくると思われる。

本研究では主に大久保(2005)による調査枠組みを踏襲し、「友人との関係」「教師との関係」「学業」という学校生活要因に「部活動所属」を新たに付加し、学校適応感を説明する要因を構成し

た。しかし、「部活動所属」は学校生活を構成する“場”であり、「友人との関係」「教師との関係」が「部活動所属」の内実も規定する学校生活全体にかかわる“関係”でもあることを考慮すると、必ずしも整合性がとれているとは言い難い。

以上の点は本研究の限界となっており、今後の研究において検討を要する課題でもあることを指摘しておきたい。

文献

- 青木邦男、1998 「高校運動部員の学校生活適応感に関連する心理社会的要因」『学校保健研究』 40 : 411-424.
Benesse 教育研究開発センター、2007、「第4回学習基本調査報告書」。
桂和仁・中込四郎、1990 「運動部活動における適応感を規定する要因」『体育学研究』 35 (2) :157-185.
間宮武、1979、『性差心理学』金子書房。
文部省、1997、「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」。
文部科学省、2006「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」。
竹村明子・前原武子・小林稔、2007、「高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係」『教育心理学研究』 55 : 1-10。
津留 宏編、1970、『性差心理学』 朝倉書店。
大久保智生、2005、「青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討——」『教育心理学研究』53 : 307-319。
大久保智生・青柳肇、2004、「中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『日本福祉教育専門学校研究紀要』12 : 9 - 15。
榎原義夫、1995、「スポーツ部活に現代高校生の肯定面を見る」『体育科教育』43 (5)。
吉村 齊、1997、「学校適応における部活動とその人間関係のあり方」『教育心理学研究』 45 (3) : 337-345。